



発行者
文京学院大学
女子中学校
水上 茂

私たちの千本桜

三年栗組 小川 亜香璃

練習は二年生の頃から始まった。リボンを作り、振り付けを確認し、沢柳先生の指導のもと、体育祭に向けて練習した。最初は簡単だと思っていたが、段々と難しくなっていく、ミスをすることも多くなった。周りがうるさくなってしまうこともあって、先生に注意されることもあった。それでも練習を続け、少しずつミスが無くなってきた。息が合うようになってきた。

予行練習の日には、暑い日差しの中、学年全員で行進から演技まで通して練習した。予行練習が終わりに、家に帰ってから演技に必要なものなど体育祭に向けて準備した。

そして体育祭当日、その日も暑かった気がする。会場前で友達と会い、少しの間、外で待っていた。会場が開き、席に座り体操服に着替えた。自分が出場する競技を終え、ついに演技の最後の練習を行う。サブアリーナに向かう時間になった。サブアリーナはとても広く、全員で練習するにはびったりの場所だった。出番まで練習した。

そして本番になり、みんなで練習し続けた成果を見せる時がきた。行進用の曲が流れ、振り付け通りに行進し、それぞれの場所につき、千本桜を踊った。踊っていると客席から「フワー」「わぁー」などの歓声が上がって嬉しかった。

演技が終わると、退場するときも歓声が上がって、今まで練習してきたよかったですと思った。



クラスの気持ち

三年栗組 大塚 絵莉

「せーのっー」
大縄が始まった。
「一、二、三、四、五...」

練習より跳べるか全員不安だったが、四十回を超えた。練習では十回程度のクラスがこんな回数まで跳べるとは、だれも思わなかっただろう。

この日まで私たちのクラスは毎日練習をした。朝七時四十五分に練習が始まるが、全員が練習に参加することは、あまりなかった。また、全員が全力で取り組んでいなかった。他のクラスが協力してやっている中、私たちのクラスはバラバラだった。

みんなの気持ちが変わったのは、体育祭予行日だ。初めて、全クラスで並んで本番のようにやった。朝練の時に多く跳んでいた菊組や桃組があまり跳べていなかった。栗組は最下位だったが、回数が変わらなかったことで、クラスみんなが、これはいけると思えたのだ。

そして、体育祭当日。どんどんプログラムは進んでいく。ついに大縄が始まった。みんなの気持ちが揃っていたからか、AもBもCも、全部のチームが最高記録を出すことができた。結果は最下位だったが、気持ちは晴れやかだった。

今回、大縄でクラス全員の気持ちがそろえば、良い記録が出ると分かった。これからクラスで取り組むことは、合唱コンクール、卒業式など、まだまだあるが、大縄の時のことを思い出して、全員で頑張っていきたいと思う。



初めての体育祭

一年菊組 金子 稟佳・宮川 紗良

私たちにとって初めての体育祭が五月二十七日に行われました。

練習のときから、学年優勝するぞという気持ちで取り組みました。一年生学年種目の「台風の目」では、クラスみんなで作戦を立てながら練習をしました。その結果、タイムを計ることに速くなっていき、学年優勝への道が近づいた気がしました。本番ではアクシデントがありました。クラスのみんなの応援を力に変えて逆転して一位になることができました。そのときのみんなの笑顔は太陽よりも輝いているように思いました。

また、個人の競技では、一人一人が練習を重ね、全力を出し切り、よい結果を出そうとしていました。本番でよい結果が出なかった人もいたと思います。それぞれが自分のベストを尽くすことに集中できたと思います。

私たちは競技を見る側競技をする側だけでなく、競技を支える側として、体育祭実行委員も体験しました。初めてのことでわからないことが多かったのですが、先輩たちが優しく丁寧に教えてくださったのでスムーズに仕事を行うことができました。思っていたよりも難しい仕事が多く大変でしたが、来年も実行委員になって、今の先輩のように、来年の一年生に優しく教えられたいなりたいと思います。

私たち菊組は、体育祭で学年優勝できるように予行練習の空き時間に応援歌を考えました。みんなが歌詞のキーワードを出し合いながら、体育祭に込める熱い思いが伝わるように工夫して作りました。応援歌は勝利を勝ち取れるように、リレーのときなどに競技をしていない人たちが声を合わせて歌いました。応援歌があったからこそ、私たちは学年優勝できたと思います。



神霊矢口渡 歌舞伎鑑賞教室

二年桃組 富沢 萌香

私は、六月四日に歌舞伎「神霊矢口渡」を観ました。歌舞伎が始まる前、私は歌舞伎にまったく興味がありませんでした。しかし、歌舞伎の舞台の説明を聞いてるうちに「これは、すごいかも」と思いました。なぜなら、舞台装置の説明で、中の円盤部分が三六〇度回転して、舞台の場面を変化させる廻り舞台に驚かされたからです。他にも定式幕、花道、スツポン、仮花道、下座、床、などといった、たくさんの設備について説明されました。これらは、歌舞伎をスムーズに進めるためであり、お客さんに歌舞伎を楽しんでもらうために工夫されているものと分かりました。

そもそも歌舞伎とは、舞楽や能・狂言、文楽と並ぶ伝統的な舞台芸術だと言われています。歌舞伎と聞くと昔の芝居、とても難しい、テンポもゆっくり...。「ついでに行けない」と頭からあきらめ、毛嫌いしてしまう人が多いと思います。もし本当に、誰が見ても分らない、つまらないものだとしたら、歌舞伎には伝統芸能と言われる資格はないと、私は思います。第一、そんなものならもうとつくの昔に、歌舞伎はなくなっているにちがいないと思います。歌舞伎は確かに、四百年も前に生まれたとても古い芝居です。とにかく古いけれど、現代も立派に存在しています。また、今では日本だけではなく世界の人に、人類が作った最高の芸術・文化の一つとして認められているのです。このことも「すごい」ことです。

そして今回見た「神霊矢口渡」では、主な登場人物として、頓兵衛、お舟、新田義峰、傾城うてな、六蔵といった五人の登場人物がいます。見ているだけで、登場人物の人物、ここがどのような場面なのかも理解できました。歌舞伎には、見ているお客さんを引き寄せる力があるのかもしれない。私は初めて歌舞伎を見ましたが、確実に歌舞伎に興味を持ちました。



